風流茶之湯流傳集 一

夫昭々として高明なるハ天なり清濁を
主理や廣く厚ふして無盡藏なり
人ハ其中に生じて萬物備ハる七情によ
感して飲情きハまりなし和漢風俗
中比より茶湯を翫ぶ事も徒に翫好
成事とするにハあらず五性に本づね
くて端を擴るの故に茶道ハきハま
れるなし今編るの流傳集

ハ茶道の来由古人の嘉言名師の辨
論を詳にすといへ共此巻と繙附
之遠きハ往古より淵源を究め
近くハ睫毛の至理を暁して雲霧
を開く日月とみるがごとし豈不益
の至宝といハざらんや于時元禄七
甲戌中夏中旬廣長軒序

當流茶之湯流傳集巻之一目録

當流茶之湯流傳集巻之一

三疊大數寄屋式正之習

一三疊大ハ古織公此作也一疊半ハ茶せずして出入を致しかたく候などと無故一疊半より又一疊加へ三疊と成して一尺七寸三分の疊を居たゝみにする是を大目と號す大目を合て三疊大目と號故より疊ハ何疊成てと大目の疊炉の先一尺六寸八分にする時ハおしなべて三疊大目と云ば當代數寄屋囲此本式ニ成まじたり式正の圖有

數寄屋腰掛待合之圖

上腹雪隠
待合
中クグリ
アウカウノ石
下腰掛
相手之石ヨリ
鉢ノ上ニテ
二尺五寸
此石
二尺
四寸
九寸ノ石大キニ
勝手
茶道口
大目
床

客入并次第

一 兼日(ケンジツ)亭主方より御茶一ふくと案内(アンナイ)書状来る
時日ニなりて何とも客中ト合中宿(ナカヤド)として待
そろへ数寄路地(ロヂ)入をする待合は住居ノ上下など
きるなり又ハ何り又ハ中宿しきる事と何り首尾(シユビ)
次第也又お客中の知(シレ)ざるすとも何りも時ハ思くニ
住も故人数も知をも待合へ入来くも待合(コチアヒ)の
かきより心を付べし子細ハ其日の客の数ほどか
さ何りも語るまる人気を付庭ハ露地門の戸をあけ
数待合へ上りて中くぐりより気を付待居ル亭主
しあそろへをうしろけの縁かんの窓(ニド)よりみえく

あそろひたる時路地のそうづらなどみまはしせき
だいニツ三ツして中くぐりの戸をあけ数寄屋の
裏(ウラ)付ぞうり也しト下へおりて待ゑしたぐひの位
よ位へして亭主ハ中潜(クヾ)りあけ(アケ)石の上ニ居中潜(クヾリ)
の敷居(シキイ)ニ手を付先礼(ニウ)をする今日何も客衆(モ)の
是へ通らるべしと挨拶(アイサツ)中かけ手ぬぐひ取出し
潜(クヾリ)りのほう立寄居ると銘巾ひ戸を立寄か
手の入ほどニして置也座へ出る(ソト)ニ三ツの間を
あの位ニ位く中くぐりの外の石へ出て亭主又
まる位のまたきたらバ影向(ヤウガウ)の石と出て挨拶数寄
亭主の又く上座下座の付直大事にて挨拶まう

うけ茶の文字ひ井乃水などすくふくバかりとへ
ごしらへらん鐘(シヤウ)の拍子(ヒヤウシ)など井の井おも清水に
ありきたる声ハ擬宝珠(ギボウシ)などあつたる傍らに
一 まへハ内より筒(?)ハ北の方閑(トキ)に戸を立何とも為を為(?)て万事につと
出て水鉢に向ひて抓(ツマミ)を左右にしてよろしきにて
ひよくれはよれを遣(シカヒ)口するぎに浴(ユアミ)よりあたるをひ
しやくの柄にうけ并し石ぐら色(?)バひしやくかくし石の上にて
よりけ釜金の湯焼湯ハおもてのけよかへる捐からのむ
けよかく堂しし刀かけの下へ住捐るを為をぬきて
釜擦(ニジリ)よりくゞり二度よりけ口をみてあかく
くずりを入居てつりぞうしまとを出し床へ向ひ

うけおを三尺ほど大く見る様の色どバ左く 一同
べし為大目へ往たかを見たる水指をみんしように
付く客を向ひ亭主の如く角くを見畳の如く居
かわりの居様にうしろ中住下往能く左に付て
亭主ハあつへて茶道口を
大明常にしたきく茶碗
なじして戸をあけ茶湯より
一段ならぬ礼あるも儀礼
とするなり

とり又左へ持右の茶巾を水指(ミズサシ)の蓋の上へおけ
茶碗を右の向(ムカフ)へ直しまはし如図置右の柄
杓の中ほど帛にて持替(カヘ)右
の釜の蓋を行儀に置
帛ハ膝よせ
さしひらく
扨湯ニ柄杓入手
まく左へ渡し右手
帛にて釜の蓋を
して柄杓ハ行儀よかる右の茶碗の手
と茶碗の縁にうけ右の湯汲三つして茶碗へ下に

置右より茶巾を盆のうへし志ぼり茶巾たゝみさと
帯して水指の上へおけ右の茶碗を又湯をくみ二つ
して是と茶碗のほとり
よくく本在へもし
手にて茶巾
をあらくし茶
碗を左の茶碗
湯をすく中に持
茶巾の如帯巾
ひ中(ナカ)へ茶巾入下にかきまわし茶巾を中の如常
さらに水指のうへおけ右の茶杓を左の茶入

くされど左ニ茶茶碗右ぐしれ茶てぐき　茶碗の
内どろくのむこおよりの人数と茶碗の内の茶の
ほどとくく絶かげんニのむべし先ハ三口ほどよき
と知べし　扨親指(ユビ)のちらくし茶碗の縁と巾ひい、
たぎ左の手ぞ次座ハ渡すべし　中座ハ戴(イタヾ)付(ク)上
座法礼とする三人ハめぐし帛をとし上座おへおし
釜上座礼てくぎこ其の其中ハおし釜こ下座ぐしの
三切茶碗上座へ指次上座もうらくまて一人かゝる云
茶碗と取く先息(イキ)を弟ノ下ニ居て茶碗とあらて
の事を法く其扨右ぐし中座のおニ釜すれ下座
息のきつ [illegible] 下座炉ぎハへおりて

戴(イタヾキ)下ニ釜

一　亭主ハ中入し袱(フク)帛のひつる时ニ太目へおく竹
輪を取て前座ニ釜をすくし帛礼て釜の蓋掛
ひかれく竹輪ニ [illegible] ハ揃ニおくさて茶
巾取釜の蓋の上へ釜をすある水指れ蓋を取茶
碗を切水指の通りの盈(コボシ)の上よりかべよ水指釜べし
取柄ちるひつく取くれ走し水一柄移のくく釜こけ
釜清き内よ茶碗ゆるを右し手ちられ左の手を
添先ぬくをろ息(イキ)をきく下ニ釜をす时まニ一同(トウ)よ
礼をてつまも法礼とする扨ひつく取湯一つへ
先下ニ釜右くし茶碗取左へ渡しする右し手ニ

湯口と巾ハ上又右にして下に置柄杓取湯一口入て柄杓
水指へ入水をたんぬと入て茶碗へ手前へ入移し八釜
へ入ひとく下に置き手にて茶筅取茶碗へ入たの手
と添ばしくをぬりとり此蓋に置左にし茶
碗取左へ添て湯すくへ茶巾取湯口をおしてまく
中へ入右にして下に置茶筅取茶気と上ふる揃
よ入く手前にて茶杓取帛取出て帛ばさみ一つ巾ひ
して盞（ユホニ）のとにし柄ひ帛の下ぐ此を取て又さばき絶ツ
巾ひ右にし向をとぬき出しむね茶碗に入る
右にし茶入取て水指の方接（ハラ）通（トヲリ）一寸出ちのけ置こ
まにし茶碗に又一寸かうのけ置右の方ふし帛

様よちきミひし令く取出し水を一柄杓つる釜
の縁にかけおろし左へ添し右にし釜の蓋す
るたゆる柄杓右へ元作り倫又右水指蓋水指の方
へ向ひ左にし水指の蓋取揃にをし右にし水指に
蓋する其付あとる濁茶入つおし一つおうる去
亭主茶ん同ト採が茶入し主立たる辞（ゴ）退（タイ）
するおきて去様より集て一五ん同に云
く、いつりひ令く取柄へと作り倫とよる茶及口
の戸とぬ水盞を外へ出しか絶ずしめてよせ茶
入右にし取おし帛取め帛ばさみしてたゝし取上
巾ひ帛八諸へ入右にしかぎへ置ての中へ出すとあ

下にまを付茶入に付すゝことゝとれ亭主の膝に置
後(ユリ)ゐらくらん一つかと云ある茶杓(サニヤク)をも時ハ帛巾取おとし
出帛にかゞき巾ひろひ先を右の方へちる様よくひと
我が方する袋ときハ右まくはりの方をあの
方へ引しまきお茶道口とへのけ茶碗おし水指
扨水盈のふちの上に蓋緒ところ(アトコロ)紙取出し水差
の縁蓋の跡(アト)水盈のふち巾ひ紙懐中して
水指を茶杓ちへ立茶杓口の戸へ直くおくなり
一客ハ手前の内茶入を見る時ハ下ハ水指の蓋する時に
と川時ふくかる茶入れなる茶杓取り一の字と云も
時帛とも先よく茶入取出し次第分能くよ

時ふくさ紐緒ぐり紙を取出し手をすきハと巾ひ
まひじと下に付先茶入の蓋取内の茶の香
加減をみること子細ハ何程にかむけて茶のこ
ばらく半ちまきと云ことを二三度おろし(タメ)て掬蓋の内張(ウチハリ)
の不よ気を付ること大事の習也蓋をとして
左の人指しおさへ右にかれ出しふくさ茶入を四手
らすと高く上るよ大かぬしつけ右で次第の方
よ置中に置て同じ茶杓のかたの時帛を
金(カネ)一の如と云亭主の向ふ時ハ先帛れく四角
よして茶杓取くく深(フセ)ところ下にまを付るとし
下に置と同じかくと袋(フクロ)いとまく取の裏(ウラ)をたる

次に右にとり右にて左にとり蓋のおへ茶入茶杓帛
こゝをさすに指出す時渡れ帛さへの内膝の方へ
寄せ中に帛と茶杓茶巾を右の方に茶入右の方に
備置なさるべし
一 亭主ある此茶入服紗(カヘルテイ)をする戸を明出る右に茶杓
帛指をさし入れて左へ渡し右に袋を取て台に茶杓
右に茶入を取上る手前上座先列の人炭を継
と申し二ツ炭迄ぬ法を云 亭主炭継て不調法(ブチウホウ)仕
人に後薄(ウス)く茶を一ツと観ある亦懸一ツ如く渇(カツフ)
ハ加炭と燃に出し亭主お取かゝへ又不調
法を一の継目とと云 御手前一立なるべし

立炭の仕様此事
一 細(サイセン)あの瓢(フクベ)に炭を入香合(カウゴ)をも加へ出すべし
指出て客の如く釜を此
上様てかけるを炉に灰(ハイ)を
まくとかつくまくべし炭
のおきをとる
炭(ケイ)の継おり
たる所面白(ヲモシロク)炭を
まずほどける
あとへ先を継釜脇(ワキ)
よそろくとせずを為し右に炭を継かる

釜処右の通

釜一右の通

勝手
大目
火焼口

吾より羽箒にて炉の内りをきに下より左右
の炉のきハへ掃よく茶道とよる事ハ火箸(バシ)
とるく下火を出し初の炭よたくらけ土鍋
と炉ぬきハへ掃ふ灰
掬(スクヒ)よく灰をもちを
又此図遣(ヤリ)し白炭
と夜土鍋へ入
輪炭細を入
其をはぢりつゝて炉へ入火箸(バシ)よく置白り極る也
入べしむ輪炭白炭とよく付て香合を為て
蘇(スキ)物(モノ)を炉へ入る事を斯ありかなる事ハ此常にして

中極ぬきハ釣(ツリ)へ出き掃土鍋よ有る白炭を出
く菜(サイ)籠(ロウ)へ加へし吾ちり茶碗足を明きに蔵
を土鍋を出し先志ぶ羽箒にて炉より
茶籠は但土鍋の
縁よくたき出版
土器は爬(ヅ)よくて
き此図其中に
乗火焼口を
明(アケ)掃に人以得て行口を出し為よく此図乗行輪
とる下よ極き茶懐(つき)に茶の蓋を為行口の蓋
寄たよ其を為右す口ぬ其を掃水を放ほどに

一亭主火焼口の時ハ出口ゟ出の時も膳を出し
茶の時も出る時ハ何時も火焼口を開き揖を
おきなく羽箒にてちりをはらひて後流
軸物に出る客を待請る道の次第ハ皆此の
如し

一客座(クライ)敷(ロキ)名残(ナゴリ)の掛物(カケモノ)とくと見て中立して刀
かけへ往て懐中扇子を取出し膝合(ニチアイ)にかけのこと
き時ハ刀を置て立べし見へ済バ客
刀掛の路地へ出れバ刀かけへ往き故刀を取て
立べきなし

一亭主ハ中立の時出る事も何事もきりしめ

取りかけ花入ともに又ハ置花
入あしらふ茶杓の荘下に置
よくかざりて後しけ置
飾るべくの手中置べく
茶入ならびに何れも又ハ掛(クヮ)
一とよする事と同じく銅鑼(ドラ)り

床
亭主
客
上踏
風炉先窓
火焼口

喚鐘(クワンセウ)とて一つ打も但も乞一つ

一扨ハ茶道物事を追付て水遣(ワカヒ)又刀かけに往
刀掛扇子を取て踏石にて往花をみるも
出る事大目へ往物をみ水指をみ茶入又茶碗
ところ定付置べし

一或ハ帛とりて下座より帰ることを云帛ハ茶碗
夜上戴紛経よのミ湯座へ済ス中陸も下座
同半之茶碗下座より息と出す又と行まと
座へ持淮とかり色貴人あいもへ也息比聞
揆之多く大きはる道之帛ハ中座もちとけ退く

一亭主帛の飯る所と出す又再く帛ヲ出るのにて
夜之水指の蓋夜ひらく先水一柄杓入く湯ッ茶碗
飯るとぬくを見き茶ヶ下ニ垂とまへ一回て礼
之亭主と相禮とするひらく夜湯ととへ入茶つ
捨文湯入水てへくまうハ茶碗へ入又すこい
茶一入茶茶夜きつあげハくとぬきまりし茶

碗夜湯すゝく茶巾夜中へ入下ニ置茶筌夜入
茶杓巾ひらけちや入より茶せんのあとく清
くし茶碗ハ茶入の後へ遣し如常柄杓ニ
水一すくひ釜へ入柄杓の底ニ切ゟ湯少し
すくし柄釜の蓋するなりひらく蓋置ニうけ
水指の蓋夜後くよしてする事時より御
茶入と茶碗を大の如し皆く清め置
茶碗夜水指の先ハ置ニ帛作配して茶碗
出ときあらくひらく下座夜時まて夜清ら仕
後への事る云漱を夜清め一入後時ハにあく茶
入れなるあと知る事もしある退

付書院
四枚腰障子
八畳敷
四枚唐紙
床
ちがひ棚

客入此次第

一 四畳半切の小座敷ハ路次より入て手水つかひ座敷(シキ)
代(ダイ)より躙り口へ通り戸をあけ刀をぬき刀掛に
かけりて入べし先上座へ着座すべし床の掛物をみる
其床へ向ひ三尺のき先花を見てよく下り此卓(シヨク)
をみるべし棚あれば立て一見すべし又棚のなきへ
まはり上段床をよく見て下り(ヨリ)勝手院(?)の方へまはり座
屏(ベウ)風のある方へしてみれバ炉の方へ見わたし炉を見る方へより
又みべし炉立て釜をぬき(?)自在をよく見る
ざる様よく大目の内へ入棚物を見て下の柱と
その(?)あたりの方へ向ひ見わたし自在を見

釜を見炉中の角をも見る(?)自在を見(?)茶筅(?)を
して立炭斗を出し座にて茶の湯の如く座付
べし次座分下座まで上座のごとくにて座付べし
座定て亭主出て一禮(レイ)済(スミ)四方山(ヨモヤマ)の物語
ばなし済て炭斗を見る炭のあとに大目の内点(?)時
ある時を見て又ハ小棚(?)に炭斗奈上に香合
羽箒など置とる(?)如此炭斗にのせ入炭と棚
の下に置上棚ニ鐶(クワン)羽箒など重(カサル)にのせて
一 勅作(チヨクサク)又ハ名物(クホツ)などの竹細工(サイク)の香合などハ
其時ハこしらへに乗(ノセ)下たるにのせて炭の時
うしろへ取出し薫物(タキモノ)などくべる様なれど

付書院
四枚障子
中ザ
中ザ

一付書院文案のかざりし
喚鐘
手木
一書物かさね硯なとの置様次第也
書物
文鎮
硯
見屏
墨
一棚文案のかざりし色々の文案ハ亭々の心次第也
水精
フトン
茶筅

右座の尺の棗付書院棚ニ棗ニ一振之忍縄之
手前甚くの道具ニ仕まり先を掛け圖よ
何ノ入を主なり

當流茶之湯流傳集巻之二目録

風炉客入之次第并餝付此圖
同炭手前之圖
同前中立茶手前此時客餝付此圖
同手前點之事
臺子此習
式正大書院上段之間二間座縁かざり臺子莊飾
上段本座之間中央の卓卓下之花の圖
付書院之文臺并莊釣銅鑼抱之圖
棚文臺塵壺之置合圖
二間座三幅一對二瓶之文臺之圖
縁かざり違棚手前臺子文臺置合之圖

タメニナルコト
アリ